

第2章 問題解決技能トレーニングと SOCCSS 法

1 SOCCSS 法

WSSPの就労セミナーで行う問題解決技能トレーニングは、発達障害の障害特性を考慮して、問題の分析、解決方法の検討を効率的・効果的に進めるためのトレーニングです。問題解決の方法は、発達障害者が日常生活を通して自然に体得できるものであるとは限りません。そのため、このような問題解決技能は、体系的にスキル付与される必要があります。

SOCCSS 法は、ジャン・ルーザが発達障害のある息子のために発案し、カンザス大学（当時）のブレンダ・スミス・マイルズが開発しました。問題解決技能トレーニングでは、この発達障害者向けの「SOCCSS 法(ソックス法)」を援用して実施してきました。



図4 問題解決技能トレーニングの位置付け

(1) SOCCSS 法とは

SOCCSS 法は、S (状況把握 Situation)、O (選択肢 Option)、C (結果予測 Consequences)、C (選択判断 Choices)、S (段取り Strategies)、S (事前試行 Simulation) の枠組み(フレームワーク)で構成されており、社会的場面の因果関係の理解や、問題解決スキルの育成の手助けができるようになっています。

問題解決技法 (SOCCSS法)

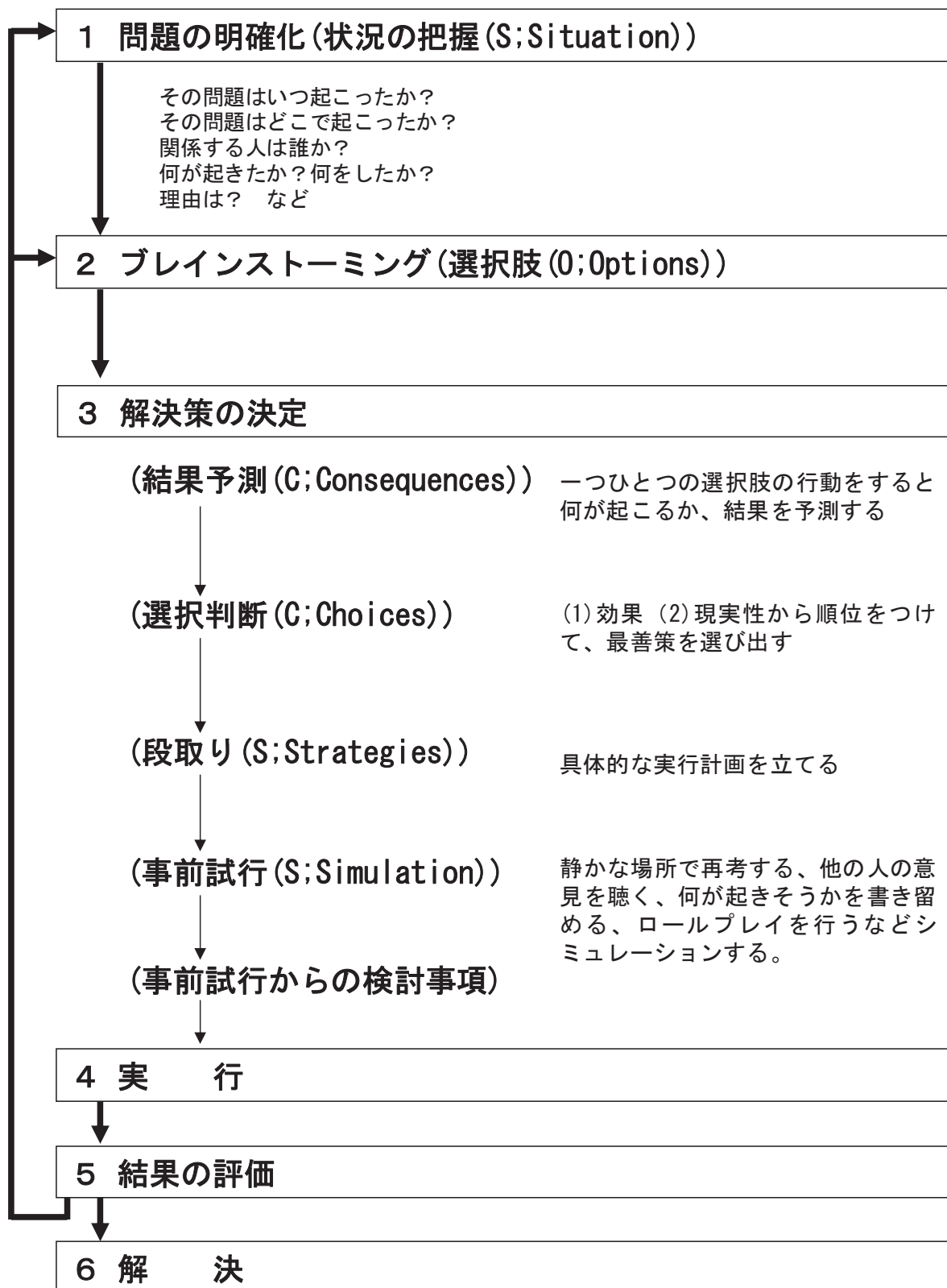


図5 SOCCSS法実施の流れ

(2) SOCCSS 法の特徴

発達障害者向けに開発されている SOCCSS 法には次のような特徴があります。

○ 視覚的に整理できるよう構造化されている。

SOCCSS 法は、問題や解決策等を視覚的に整理できる枠組みとなっています。発達障害者にとっては、問題状況を整理しやすく、枠組みがあることで見通しを持ちやすい構造になっています。支援者にとっても、枠組みがあることで本人からの聞き漏らしを防ぐことができます。

また、SOCCSS 法は、本人単独で行う必要はなく、構造化されているので支援者と一緒に実施できるようになっています。

○ 年齢、環境、内容を問わず、発達障害者に幅広く使用できる。

SOCCSS 法は、成人だけでなく、学生や子ども等のあらゆる年齢の発達障害者に使用することができます。また、職場だけでなく、地域社会、家庭、学校等の様々な場面や環境で使用できるようになっています。もともとは、社会的場面の問題解決に使用するように開発されてきましたが、人間関係に限らず、職場の作業や生活習慣に関することにも活用でき、幅広く使用できるようになっています。

○ 本人が納得して行いやすい。

SOCCSS 法は、支援者の手を借りながら、本人が自分で模索して、実際に問題解決することを経験できるようになっています。

SOCCSS 法では、特定の解決策に支援者が本人を誘導することはしません。本人が「この言動をするとどうなるか」と結果を予測した上で、本人が「やってみよう」と思って行動することを尊重する枠組みとなっています。したがって、本人の内的な動機づけを損なうことなしに、本人の主体性・納得性・意欲を尊重して実施できる枠組みとなっています。一般的に、課題について、支援者が本人の言動に対して是正を指示するような支援だと、本人が納得せずに反発する場面も見られますが、SOCCSS 法は本人の価値観と効果感を連動させるようになっており、本人が納得して実行しやすい枠組みになっています。

○ 社会的場面の理解を助け、問題解決を体験的に知ることができる。

SOCCSS 法は、通常、問題が起こった後に用い、問題があった社会的場面に対して、次の (a) ~ (c) に対する理解を助けます。

(a) 因果関係、(b) 大抵の社会的場面で選択肢があること、(c) 多くの社会的場面のもたらす結果に対し、自分が影響を与えたり、自分で予測したりできること

SOCCSS 法を実施することを通して、本人は問題が生じている状況に対して様々な解決策を考え、結果の予測を行います。いろいろな解決策を出すことは、物事を違った角度から見ることにもつながります。結果の予測をすることは、職場で生じる出来事にうまく反応することにつながります。

○ 他の支援方法の併用等、様々な応用が可能である。

SOCSS法は、集団のみならず、ジョブコーチ支援や個別相談等様々な支援で活用できます。

また、他の支援方法との併用も可能です。例えば、自己認知力を高めるセルフモニタリングの発展形である「ビデオセルフモニタリング手法(※)」等をSOCSS法の中で実施することもできます。

その他、本報告書38ページにある「SOCSS法（簡略版）」のような応用的なやり方も可能です。これは、本人から選択肢が出にくい場合や、各種支援上の時間等制約がある場合に、SOCSS法実施用紙（図7）を使用せずに、支援者が本人に合った選択肢を提示して通常のSOCSS法を簡略化して実施する方法です。

このように、SOCSS法は他の支援方法と併用することができ、様々な応用が可能です。

(※)ビデオセルフモニタリング手法

ビデオセルフモニタリング手法とは、支援者が本人とともに、本人が映っているビデオを見て、適宜質問やコメントを加えて行動やふるまいの自己認知力を高め、解決法と一緒に模索していったり、行動抑制を促したりする支援手段です¹⁾。本人の課題となっている言動について、支援者が言葉で指摘や助言をすると、上から言われたように受け止めて反発したり、言葉だけでは本人が納得できない場面も生じることがあります。ビデオセルフモニタリング手法では、慣れるまでは撮られることに抵抗を示すかもしれませんが、ビデオに映った自分の言動を視覚的に見ることで、自分の言動を理解・認識しやすくなり、本人自ら納得して修正することができます。

発達障害者用に開発されたSOCSS法の特徴

- 1 視覚的に整理できるよう構造化されている。
- 2 年齢、環境、内容を問わず、発達障害者に幅広く使用できる。
- 3 本人が納得して行いやすい。
- 4 社会的場面の理解を助け、問題解決を体験的に知ることができる。
- 5 他の支援方法の併用等、様々な応用が可能である。

図6 SOCSS法の特徴

発達障害者が抱える問題は多岐にわたります。WSSP受講者の中には、それぞれの抱える思考や行動の特異性が児童期・青年期を通じて深く形成されてしまい、思考や行動が他者と顕著に異なることについて自責の念に駆られている者や、過去の嫌な記憶を繰り返し思い起こし、自己効力感を低下させている者、うつ状態等で二次障害を抱えている者も少なくありません。

通常、何か問題が起きた場合、①問題状況に気づき、②要因や背景を客観的に分析し、③現実的に対応可能かどうかを判断し、④事前に選んだ選択肢に対するシミュレーションを行い、⑤行動に移すという一連の過程を、“何気なく、即時的に”対処していることが多く、仮に選択行動を誤ったとしても、再度効果等の検証を行い新たな対処方法を“自然に”選んでいることが多いように思われます。

しかし、問題解決や意思決定の方法は、発達障害者にとっては日常生活の中で自然に体得できるものであるとは必ずしも限りません。また、発達障害者は、問題場面に関する事実を思い出すために、より多くの手がかり（プロンプト）を必要としていることや、解決法の質が低いことも指摘されており、問題が発生しても効果の薄い対応方法しか思いつかず、衝動的に同じやり方で対応して失敗を繰り返す者も少なくありません。

SOCSS法は、行動を予測し、ミスを減らし、社会的ルールや周囲の状況を理解するための構造化されているフレームワークです。「このように行動するとどうなるだろうか？」と行動の結果予測をした上で、本人が自ら納得して選択し問題解決に向けて行動できるようになっています。

職場でトラブルが生じた際に、支援者の手を借りて状況を解釈し、本人が納得した上で自主的に解決に一步踏み出せるようになっています。例えば、本人が職場のルールに逸脱するような行動をして問題が発生した場合には、その場面を本人と支援者が振り返って一緒に分析し、今後どのようにしていくと良いか予測した上で、今までとは異なった行動を実際に行ってみるところにSOCSS法の特徴があります。

(3) 他の問題解決の方法とSOCSS法との相違

SOCSS法による問題解決の方法は、問題をなくしていくというよりは、本人が支援者の手を借りながら、主として、より社会的に適切な手段を検討していく方法となっています。

他の問題解決の方法の中には、事前に問題解決に向けた「目標」や「解決のイメージ」を立てることで解決に向けた行動を促す方法もあります。WSSP就労セミナーの集団で実施する問題解決技能トレーニングでも、複数の受講者がいて、解決する方向性を統一しないと議論が噛み合わなくなるため、テーマとする問題に対して解決する「目標」や問題の「原因」を定めます。

しかしながら、発達障害者の中には、個別相談等の場面では「目標」や「解決のイメージ」を検討することが難しい者も少なくありません。そのため、SOCSS法は、他の問題解決の方法のように事前に「目標」や「解決のイメージ」を定めなくとも、起こった問題場面をもとにして解決に向けた支援を進めていくことができる枠組みとなっています。

また、SOCSS法以外の、他の問題解決の方法には「原因」を見極めて解決策を見出し

ていく方法もあります。このような問題解決の方法では、問題に対する真の原因を見極めることが重要で、これら原因に対する解決策を考え、メリット・デメリットを確認し、解決に向けた取組を行っていくことになります。しかしながら、複雑な問題の場合、実は因果関係の中で「原因」を特定することは必ずしも容易ではありません。なぜならば、問題に対する原因が一つではなく複数ある場合もありますし、一見すると原因と思われることが実は直接の原因ではない場合、あるいは、原因と思われることが結果である場合もあるからです。

一方、SOCCSS法では、このような問題の「原因」については特定せずに、支援者ととともに状況を分析しながら解決に向けて行動できる枠組みとなっています。

SOCCSS法は、このように発達障害者の障害特性に対応しており、定まった枠組み（フレームワーク）により系統的にまとめていくことで、本人が自分に何が起こったのかを理解する手助けをするとともに、支援者の手を借りながら本人自身で問題の解決策を模索し、行動して、実際に問題が解決していく流れを理解できるようになっています。

(4) SOCCSS法の実施用紙

SOCCSS法は、次のような実施用紙（図7）を活用して、視覚的に整理しながら行われます。各項目欄で行う内容や記載事項は次のとおりです。

ソックス SOCCSS法 実施用紙			事前試行の方法	
<状況把握>-<選択肢>-<結果予測>-<選択判断>-<段取り>-<事前試行> 状況把握 関係する人 何が起きた・何をした いつ 理由 ①			一つ選ぶ 1. 静かな場所に腰を落ちつけ、いろいろな行動の選択肢と結果予測に基づき、どんな事前試行ができるか(できないか)を考える 2. 支援者、友人、家族、他の人に、自分の考えた行動プランについて相談してみる 3. 自分の選んだ選択肢と結果予測に基づき、その状況では何が起きそうかを書き留める 4. 自分の選んだ選択肢を、2~3人で事前に演じてみる 5. その他の方法 ⑥	
選択肢 ②	結果予測 ③	選択判断 ④	事前試行からの検討事項 ⑦	
段取り:行動のプラン ⑤			実際の施行結果・その後の経過 ⑧	

図7 SOCCSS法実施用紙

① 「状況把握」欄

「状況把握」欄では、問題や課題を生じた状況を把握するため、「関係する人」、「いつ」、

「何が起きた・何をした」、「理由」を分析し、どんな状況だったか本人とともに確かめます。

この欄でのポイントは、本人を含めた関係者すべての行動を記入することと、事実のみを記入することです。

② 「選択肢」欄

「選択肢」欄では、状況を確認した後、取るべき行動や解決策をブレインストーミングします。何事にも選択肢があり、考えてみることを学ぶ大事なステップです。支援者と本人とで意見を出し合います。支援者が質問することで本人から選択肢が出てくる場合もあります。また、どうしても本人から選択肢が出にくい場合には、支援者は本人に合った選択肢をいくつか提示します。この場合、支援者は本人に合った選択肢で、なるべく汎用性のある応用が利く選択肢を本人に提示することが大切となります。

この「選択肢」欄でのポイントは、問題や課題が生じている状況下で、本人が現在行っていることも選択肢の一つとして「選択肢」欄に記載することです。今、本人が行っている言動を記載することで、「今の言動を続けるとどうなるのか?」、「今の言動を続けると状況は改善するのか?」等を結果予測する機会となるからです。

③ 「結果予測」欄

「結果予測」欄では、ブレインストーミングした選択肢を行うと、何が起こるかを考えます。一つひとつの選択肢の行動をするとどうなるか、結果を予測します。本人がわからない場合は、定型発達の一般的な見方を翻訳する形で支援者が解説します。

本人が結果を予測することに慣れることは大切なことです。本人が結果を予測することに慣れていなければ、出来事に上手に対応することができず、結果として、その出来事からの学習ができないばかりか、上手にやり遂げることができずに不安が増大することにつながる場合もあります。

④ 「選択判断」欄

「選択判断」欄では、結果予測に基づき、選択肢の「効果」や「現実性」を確認して優先順位を付け、自分ができると思う行動の一つを選択します。「その解決策で望むものが得られるか?」、「それは自分の力で行えるか?」、「リスクはないか?」等確認して自分のニーズに応じた選択肢の一つを選びます。

⑤ 「段取り 行動のプラン」欄

「段取り 行動のプラン」欄では、選択された行動を具体的に実行するための段取りや計画（行動のプラン）を作成します。課題分析のように箇条書きにして、行うことを順番にリスト化したり、フローチャートのような選択肢の図にして記載します。

⑥ 「事前試行の方法」欄

「事前試行の方法」欄では、考えた段取りや計画（行動のプラン）を実際に行動に移す前に、シミュレーションの方法や内容を検討します。選んだ選択肢やその段取りについて、人に相談したり、他の人とロールプレイしたり、あるいは別の方法で試しに行っ

てみます。イメージしてみたり、他の人を巻き込んだり、行動リハーサルしたり等の内容となっています。

シミュレーションやリハーサルは、一般的に行われていることです。例えば、社員がプレゼンをする前に練習したりするように、自然に本番前に普通に行われることです。発達障害者の中には何かトラブルが生じると衝動的に安易に対応して失敗を繰り返す場合もあり、シミュレーション（事前試行）を行うことが大切です。

⑦「事前試行からの検討事項」欄

「事前試行の方法」欄で選んだシミュレーションを事前に行ってみて、どうであったのかを記載します。

具体的には、「シミュレーションしてみて別の良い解決方法が何かあったか?」、「考えている選択肢や段取りの修正はあるか?」あるいは、「では、このまま実際にやってみるか?」等と本人と相談した上で、この欄に検討した内容を本人又は支援者が記載していきます。

⑧「実際の施行結果・その後の経過」欄

本人が実際に決めた行動を実際に行った後で、本人に実施結果を確認します。「実際にやってみて、どうだったか?」、「問題解決ができたか?」を本人に聞いて記載します。上手くいかなかった場合は、「どうして上手くいかなかったのだろうか?」と理由を本人に聞いた上で記載します。例えば、「練習したとおりに本番ではできなかった」等記載していきます。

本人が実際に行ってみることで状況への影響を体験できますので、必ず行ってみることがとても重要です。実行することで自分や状況の変化を実感することが大切です。

しかし、中には、「実際にやってみる」と言いつつ、実行しない（できない）事例もあります。そのような場合は、選んでいる選択肢の内容を段階的にして、負担なくできることから行うようにする等工夫が必要です。例えば、時間的な余裕があれば、本人が乗っかってくる内容を選び、本人が「そんな簡単なことでよいのですか?」と言うくらい、すぐに達成できる小さなことから始めたり、相談直後にすぐできることから始めて、徐々にハードルを高めていくようにする方法もあります。

■ SOCCSS法の活用のポイント

ソックス SOCCSS法 実施用紙

《状況把握》—《選択肢》—《結果予測》—《選択判断》—《段取り》—《事前試行》

状況把握

- ・ 本人を含めた、関係者全ての行動を記入します。
- ・ その際、「事実」のみを記入することが重要です。

選択肢

- ・ 問題を解決するための
の選択肢を考えます。
- ・ 問題や課題が生じて
いるときに、実際に本人
が行っていたことも選択
肢に記載します。

結果予測

- ・ 選択肢を行うと、何が
起こるか結果を予測しま
す

選択判断

- ・ (1)効果、(2)現実性
から、どの選択肢にする
か検討します。

段取り:行動のプラン

- ・ 具体的な実行計画を立てます。
- ・ 課題分析のように箇条書きにリスト化します。場合によっては、フローチャートのよ
うな選択肢でも可能です。

■ SOCCSS法の活用のポイント

事前試行の方法	一つ選ぶ
1. 静かな場所に腰を落ちつけ、いろいろな行動の選択肢と結果予測に基づき、 自分な事前試行ができるか(できるか)を考慮する。	
2.	
3.	
4.	
5.	

- ・ 段取りを実行する前にシミュレーションします。
- ・ シミュレーションで「ロールプレイ」をする場合で、本人が自分の行動(動作や声、表情等)を自己認知できていないとき、ビデオに撮影して、本人と振り返るのも効果的です(ビデオセルフモニタリング手法)。

事前試行からの検討事項

- ・ 段取り(行動プラン)のとおりに行うか、それとも修正等があれば、記載します。
- ・ 別のより良い段取り(行動プラン)があった場合も記載します。

実際の施行結果・その後の経過

- ・ 本人に対して、実施結果を確認します。
- ・ うまくいかなかった場合は、その理由を本人に聞きます。

2 グループワークで実施する WSSP 問題解決技能トレーニング

(1) これまでのグループワークで実施する WSSP 問題解決技能トレーニング

職業センターにおいて、SOCCSS法の考え方をベースに、これまでは主にグループワークとして問題解決技能トレーニングを開発、改良させてきました。

グループワークで実施する問題解決技能トレーニングでも、SOCCSS法を援用し、①問題の明確化、②ブレインストーミング（選択肢）③解決策の決定、④実行、⑤結果の評価というステップで進めていきます（図8）。このステップを「就労セミナー」でのグループワークと個別相談（一対一の面談）を組み合わせることで実施しています。グループワークでは「1 問題の明確化」から「3 解決策の決定」のうち「選択判断」までの段階を取り扱います。問題状況の分析や解決策案を検討する際に、他者の意見を聴く機会が得られるグループワークを活用して、セミナーによる効果を高めるようにしています。

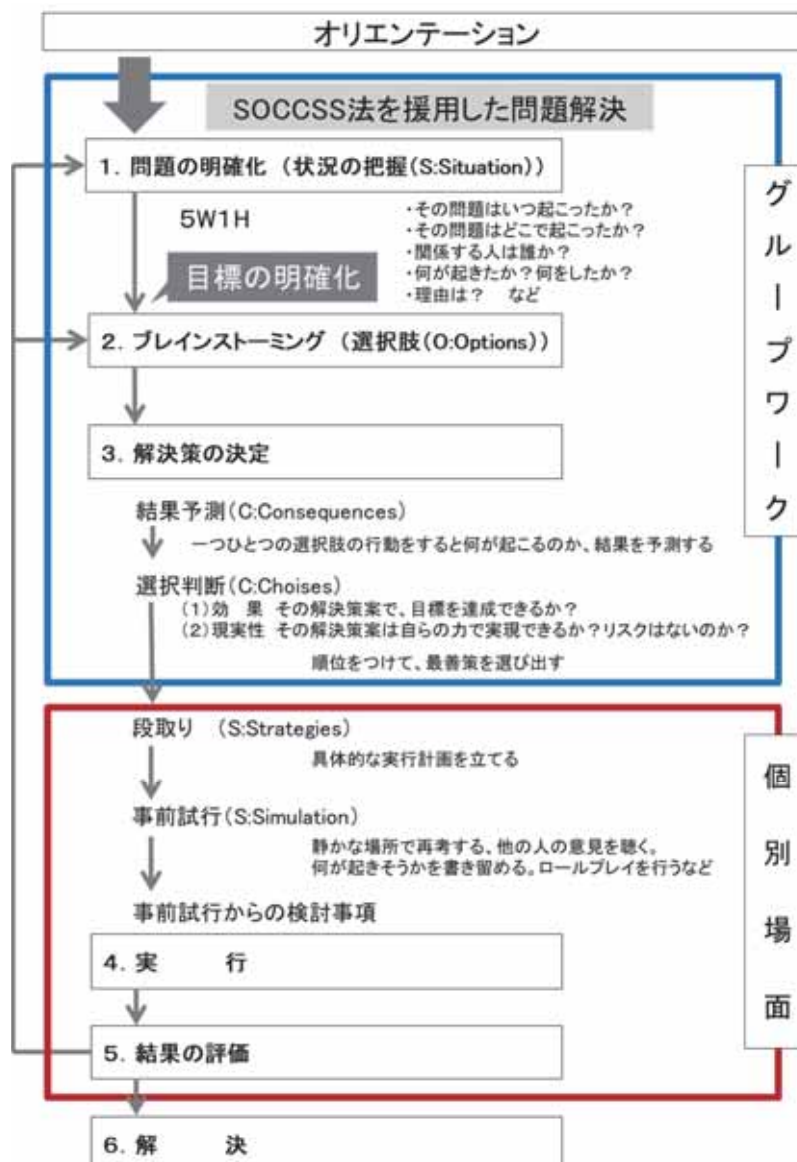


図8 問題解決技能トレーニング実施の流れ

グループワークで実施する問題解決技能トレーニングでは「S：状況把握 Situation」の段階に重点を置き、行動した時の「自分の気持ち」、「相手の気持ち」、「相手への影響」といった、比較的1人では考えにくい事柄を複数の参加者で話し合えるようにしています。そうすることで、状況に対する捉え方を関係する人物の気持ちを含めて検討できるようにしました。このようにグループワークを通じて、自分と他者の考え方の違いを比較し、振り返りやすくしています。

また、問題に関連する状況が複雑な場合や問題が複数ある場合などでは、同じ問題でも受講者によって設定される目標が異なる場合があります。あるテーマに対して集団で意見交換を行うため、グループワークの進行上、一つのテーマに絞る必要があります。そのため、どのテーマを取り扱うのかを表記する「目標」という欄を設けました。

さらに、「原因」欄を設け、対象者自身に起因すること、周囲の環境、人間関係等、環境に起因すること双方の視点から考えられる問題の原因と思われることを記入できるようにしています。

現在のグループワークで実施する問題解決技能トレーニングでは、以上の点を踏まえ、「SOCCSS法実施用紙」を改良した「問題状況分析シート」を使用しています(図9)。

問題状況分析シート						
問題			目標			
<問題状況の把握>				<解決策の検討>		
いつ	どこ	誰と	誰と	解決策案	結果予測 効果 現実性 <○・△・×>	選択判断
自分の 状況	行動	→		結果(自分への影響)		
	その時の気持ち			その時の気持ち		
相手への 影響						
相手の 気持ち						
原因				解決策の実施手順・課題		

図9 問題状況分析シート

就労セミナーにおいては、問題状況分析シートの枠組みをホワイトボードに記載し、出された意見を受講者と一緒に確認していくことで情報の視覚化・構造化に努めています。

また、個別場面においては、問題状況分析シートをもとに受講者と支援者が作成した問題解決の方法を検討できるようにしています。

(2)グループワークにおける問題解決技能トレーニングの基本的な考え方

問題解決技能トレーニングのグループワークを効果的に進めるために、次の考え方に基
づいて行っています。

ア 問題の状況や原因を把握するスキルの習得

発達障害者が、問題状況に気づき、それを正確に把握し、説明するためには、支援者が
プロンプト（手がかり）を示し、丁寧に確認していくことが必要です。

イ 解決策が複数存在することへの気づき

グループワークで実施する問題解決技能トレーニングでは、トレーニングの過程で、他
の受講者からの意見を聞く機会があります。ある問題を解決するための解決策には多くの
選択肢があることに気づきやすくするためです。自分が考えた解決策以外にも、より適切
で現実的な解決策がないかについて、改めて振り返る機会となります。

ウ 自分自身の思考や行動の特徴への気づき

問題解決技能トレーニングは、自分が陥りやすい思考や行動の特徴について改めて考え
る機会となります。受講者の中には、物事がうまくいかない状況でわずかな対応方法しか
思いつかず、同じ解決策で対応して同じ失敗を繰り返してしまいやすい人もいます。問題
場面における自分の行動や気持ちを振り返ったり、他の受講者の意見を聞いたりする過程
で自分自身の物事の捉え方や行動の特徴に気づくことにもつながります。

エ 他者の考えや気持ちに対する気づき

トレーニングでは、参加している受講者からも、できるだけたくさん意見を出してもら
うことにしています。その際、それぞれの受講者がどのような意図で発言したのかを確認
することで、受講者それぞれの情報の受け止め方、物事の捉え方があることに対する気づ
きを促します。参加している他の受講者と一緒に問題状況を分析把握し、その時の他人の
気持ちを想像したりすることで、自分の考え方と他者の考え方には違いがあることに気づ
き、「他者には、他者の考えがあること」、「自分とは違う物事の捉え方もあること」を知る
きっかけとなります。

オ 支援者は受講者の特性をアセスメントする

グループワークで実施する問題解決技能トレーニングでは、問題提起者から問題状況を
詳しく説明してもらい、他の受講者はその内容を聞きながら、問題状況分析シートに記載
していきます。把握した内容に対して、問題提起者だけでなく、他の受講者からも疑問に
思ったことや気づいたことを発言してもらいます。

そうすることで、支援者は受講者それぞれの情報の受け止め方を把握することができま
す。例えば、問題状況の一側面に注目しがち、登場する関係者の気持ちや立場を想像する
ことが苦手、状況に関する複数の情報を踏まえた上で「なぜ問題が起きたのか？」の理由
を考え出すことに時間がかかる等が挙げられます。

また、問題の解決策案についても受講者から、できるだけたくさん意見を出してもらうことにしています。出された意見から、それぞれの受講者がどのような意図で発言したのかを確認することで、その受講者の物事の捉え方と分析の仕方、効果のある解決策を考え出せるか等に関する情報の把握につながります。

さらに、解決策を実際に行動に移す段階では、問題提起者と個別に段取りと事前試行を行います。その際、実際に行動に移す際に戸惑ったり、別の解決策を希望したりすることがあります。実際にどの程度行動に移せるか、段取りを忘れずに取り組めるのか等を確認できます。このように支援者にとっては、問題を提起した受講者だけではなく、トレーニングに参加した受講者それぞれの障害特性をアセスメントする重要な機会となります。

コラム

発達障害者の障害特性はいくつかの理論で説明されますが、その一つとして「心の理論」で説明されることがあります。「心の理論」は、他者の行動の意味を理解し、行動を予測するための他者の視点に立つ能力であり、他者の考えや気持ちを理解する能力です。別の理論の「共感－システム化仮説」では、発達障害者は心の理論のように他者の心を読むことを含む「認知的共感」と、他者の考えや気持ちへの適切な情緒的反応である「感情的共感」が低く、その一方で、例えば、時刻表やカレンダー、音符、種類の分類等における規則的な関連や、AならばBという結論になるか分析したり構成したりする「システム化（すべてを一定に保つ）」への衝動が強い傾向で説明されています。この「共感化－システム化仮説」では、システム化のために発達障害者の障害特性である細部への注意が役立っていますが、いわゆる中枢性統合仮説とは異なり、システム内の多様性に注意を向けて調整する機会が与えられれば、徐々に全体のシステムを理解するようになるとされています²⁾。また、人は言語を使うことにより、直接に現時点にあるものと接触しなくとも、様々な経験したことがないような事柄を欲したり、何かを意図したりできます。まだ起きていない出来事とあたかも接触しているかのような機会を持つこともできます。問題や課題となっている行動は、本人が上手いかない対処行動や考え方を何度も繰り返して行い、他の解決策や選択肢を試すのを妨げているときにも生じやすく、上手く行っていないことを認識した上で、代わりとなる行動に挑戦していくことについて、本人の内的な動機づけや価値を損なうことなく後押ししていくことが大切です。³⁾

<引用文献>

- 1) 萩原拓（著）：「学齢期の発達障害児者が抱える社会的行動の困難性に対する包括的支援パッケージの構築」、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書、2013
- 2) サイモン・バロン＝コーエン（著）：「自閉症スペクトラム入門」、中央法規、2011、p92-111
- 3) ニコラス・トールネケ（著）、山本淳一（監修）、武藤崇、熊野宏昭（訳）：「関係フレーム理論（RFT）をまなぶ」、星和書店、2013

<参考文献>

- 1) ブレンダ・スミス・マイルズ、メリッサ・L・トラウトマン、ロンダ・L・シュルヴァン（著）、萩原拓（監修）、西川美樹（訳）、「発達障害がある子のための「暗黙のルール」＜場面別＞マナーと決まりがわかる本」明石書店、2010
- 2) ブレンダ・スミス・マイルズ、ジャック・サウスウィック（著）、富田真紀（監修）、萩原拓、嶋垣ナオミ（訳）「アスペルガー症候群とパニックへの対処法」、東京書籍、2002
- 3) ブレンダ・スミス・マイルズ、ダイアン・エイドリアン（著）、吉野邦夫、萩原拓、テラー幸恵（訳）「アスペルガー症候群への支援－思春期編」、東京書籍、2006